

# 千種川上流のイワナ (Salverinus pluvius Hilgendorf) に就て

森 爲 三

私は兵庫生物第2巻3号に「美方郡兎塚村八田川上流のイワナに就て」と題して但馬のイワナを述べた。その中で兵庫県に於ては日本海に流入する川の上流に棲息するが、瀬戸内海に流入する河川には棲息しないと書いた。その論拠は「植物及動物」第6巻11号に大島正満氏が本邦産イワナ類に関する研究Ⅲ「日本本土のイワナ」の中に「種別を云為せずして概括的に云えば東北地方並に日本海に面する北陸山陰の河川の上流で水温的に低下せる場所には殆んど普遍的にその姿を見るが、太平洋沿岸に於ては関東並に東海道の各地の河川の最上流に棲息しているばかりであつて熊野川の流域以西には全然その姿を見ない。東海道の筋で云えば琵琶湖に注ぐ諸川、例えば野州川・草野川等の最上流にはイワナがいるが、それから西して淀川水系ならびに紀の川水系に移ればこの魚は俄然姿をひそめてしまふ」と書いてあり、また岡田彌一郎、中村守純両氏共著「日本淡水魚類」140頁イワナの分布欄には「奈良県熊野川を分布の南限とし本州北部・北海道・千島及びこれ以北に産する」と記してあるのによつたのである。しかるところ兵庫県宍粟郡三河村三土中学校教諭で本会々員の内海卯一氏は兵庫生物の私の記事を見られ同氏郷里近くの千種川の上流宍粟郡千種村西河内にはイワナは棲息し但馬と同じくタンブリと称するとの通知ありその後直ちに同地方に産するスナヤツメ *Entosphenus reissneri* (Dybowski) の *Ammocoetes* 2, ヤマメ *Oncorhynchus rhodurus* Jordan & McGregor 2, オヤニラミ *Coreoperca kawanebari* (T. & S.) 1 と共にイワナ1の送附を受けた。かくなると熊野川以西にも産するので非常に興味あることと思ひ同氏に更に採集方を依頼した。内海氏は苦心して採集され8月の初め私が姫路で認定講習をしている会場にわざわざもつて来られた。その数は9尾である。これらの標本を検すると体色は頭と共に濃藍灰色で色濃く体側側線下もその色が淡くならない。鰭は瓦青色、その中背鰭及び尾鰭は色濃くその他の鰭は色が淡い。しかし胸鰭・腹鰭・臀鰭の前縁は乳白色を呈する。体側は瞳孔より小さい淡黄灰色の円点で被われ側線下に於てはこれらの斑点間に朱紅色の小点が混交している。なお側線上には長楕円形の明瞭なる Par-mark が14~15 並列する。体鱗は長楕円形で後方に向つて幅を増す。Circuli は核を中心として同心円的に環状をなすが外縁に近い1~2条は露出部で切断されている。採集標本10尾、

全長178~80 耗の中大形のもの4尾の測定表は次の通りである。

	No.1	No.2	No.3	No.4
性	♂	♀	♂	♂
全 長	178耗	173	152	154
背鰭・条数	Ⅲ, 10	Ⅲ, 11	Ⅲ, 11	Ⅲ, 11
臀鰭・条数	Ⅲ, 9	Ⅲ, 9	Ⅲ, 8	Ⅲ, 9
側線・鰭数	約 200	約 197	約 200	約 200
体長・頭長	3.8	3.9	3.7	3.7
体長・体高	4.4	4.6	5.1	5.1
頭長・眼径	4.8	4.8	5.1	5.0
頭長・吻長	3.4	3.8	3.5	3.5
頭長・尾柄高	2.3	2.4	2.5	2.5
吻 門 垂	17	16	17	17
鰓 耙	4+9	4+9	4+9	4+10

全長 173耗の雌の卵径2耗で未成熟のものである。上記の記載及び測定表から見ると千種川上流の標本は但馬のエソイワナ *Salverinus leucomoenis* (Pallas) とは次の点で異なる。

- 1 体側の斑紋は何れも瞳孔より小さい。しかし頭上及び頭上につづく背側も小斑紋散在して虫喰斑を呈しない。
- 2 側線より下方斑紋の間に朱紅色の小点が散在する。
- 3 体側に明瞭なる Parrmark が14~15ある。
- 4 体鱗の鱗相の Circuli は核を中心として同心円的に排列しているが外縁に近い1~2条は露出部で切断されている。

これらの相違点はイワナ *Salverinus pluvius* Hilgendorf の特徴でエソイワナと異なるところである。それ故に千種川上流産は大平洋に流入する河川にすむイワナに属するのである。かくなると千種川上流産のイワナは我国イワナ分布の最西限（エソイワナは山陰方面で島根県の西方まで分布する。）になると意気込んでいたが、その後田中茂徳氏著原色日本魚類図鑑昭和26年版を見ると25頁イワナ記載の分布に山陰道では島根県の高津川、山陽道では山口県の岩国川をこの魚の生活する限界とすると記してある。しかし田中先生は同書にも述べていられる様に日本産のイワナを1種にまとめていられる。私は大島正満氏と同意見で日本海に流入する川の上流産のエソイワナと大平洋に流入する川の上流産のイワナとを別種とするのである。そこで岩国川産が島根県から接続してすむエソイワナか (p.220へ)

昭和28年1月11日に行つた時この新芽を沢山取つて来て挿木をしてみた処、土も時季もその他の条件が皆悪かつたが3 cm.もある皮部をくぐつて出たばかりの白い柔かいものは約3ヵ月で枯れたが相当大きくなつたものや大小の小枝を切つたものなどは先端の芽のあるなしにかかわらず皆よくついている。

若し日本の禿山の緑化を考えるなら成育環境が杉原谷の様な処を選ぶべきであるが切株から次代の材が取れるから伐採後の植林の手間が省けるし成長が $\frac{1}{2}$ の年数で利用の域迄達するので大変な価値のあるものと確信を抱いている。

多可郡中町の森林王、岸本米太郎氏(県内需要の電柱は全部この人が供給している)の話では電柱用の杉でも現在では殆んど挿木繁殖であつて実生に比べると4、5年間おくれるが5、6年後の發育はずつと挿木の方が成績がよいとの事である。大体電柱用材は挿木で40~50年という所だそうだから若しこれをセコイヤに代えるなら僅に20年でその域に達するから(杉原谷の実生を見てもわかる)若しセコイヤ熱を全国的にあげるなら爾後電柱用材の需要は非常に楽になるものと考えられる。

なおセコイヤの挿木については「山林」174号(1944)に出ている。

それによると挿木は4月中旬苗穂をアルファナフトール醋酸の50000倍液に24時間浸し、よく水洗して挿す。日覆をして余り風の当らない所がよい。また水樹の管理の困難な時はダンゴ挿しも成績がよい。

実生法は11月に取り蒔きにすると発芽率は最もよいが霜柱の立つ様などころではよくないから春蒔にする。覆土は0.5 cmにして上からうすく藁で被うておくといふ。

〔付記〕昭和28年1月11日調査の節森林組合の好意により杉原産の *Sequoia* の堅果と種子、アメリカ産の *Sequoiadendron* の種子とをいただいたことを付記して感謝の意を表しておく。(28.12.20.田中)



Iは枝で $\frac{1}{2}$ 大、IIは種子で4倍大、IIIは $\frac{1}{2}$ 倍である

〔室井云〕ここに載せた図は昭和28年11月15日、田中先生の案内で現場を見ることが出来た時に採集した1枝を岡村はた先生に写生して貰い挿入したもの。

(P221から)

或は熊野川、千種川からとんで産するイワナかが問題となる。もし前者であるとする千種川上流産がもつとも最近内海氏の報告によると西河内の分水嶺を西に越して岡山県英田郡栗倉村大芽吉井川の上流にも棲息するとのことであるから兵庫県に近い所がそれより以西より発見されなければ分布の西限となると思う。本稿は全く内海一氏御採集の標本と報告によつて記述したもので、同氏に最大の謝意を表する。